

2017年度GTセミナー 第44回保育環境セミナー前編 2017.7.10^{MON} ~ 7.12^{WED}

第20号 2017年7月17日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カグヤ 奥山卓矢

第44回保育環境セミナー開催

先日、第44回保育環境セミナーが東京の竹橋で開催し、
全国から81園、計150名を超える先生方にご参加頂きました。

プログラムは、保育環境研究所ギビングツリー代表の藤森先生の
基調講演、見学園紹介、懇親会、実践園報告、見守る保育の5つの
ポイント、ミマモリングソフトの説明、ドイツ報告、Q&A、
園見学が3日間に渡り行われました。

藤森代表の基調講演「見守る保育の環境と創造」の講演録は、
最終ページに掲載しています。

また、過去の保育環境セミナーのQ&Aの質問集につきましては、
本誌、第3号をご参照ください。

見学園紹介

社会福祉法人省我会 新宿せいが子ども園

開園：平成19年 定員：177名

東京都新宿区の区立園民営化によって、平成19年4月に開園しまし
た。地下1階地上4階のスタイリッシュな都市型の保育園。0歳から
6歳までの発達性を保障し、子どもの主体性と社会性を育む保育環境が
用意されています。



会場の様子



2017年度セミナーパンフレット

社会福祉法人菊清会 甲ノ原保育園

開園：昭和37年 定員：225名

東京都の郊外の住宅地にある大型保育園。平成11年から異年齢児保育を始めました。地域に信頼を築いていた伝統ある保育を一変させたため大変さはありませんでしたが、今では見守る保育の実践を古い園舎を少しずつ改装しながら進めています。

社会福祉法人菊清会 橋本りんご保育園

開園：H17年 定員：190名

相模原市の民営化第1号として開園。東京や横浜のベッドタウンのため通勤時間も含め子どもの保育時間が長い。園長・主任以外は異年齢児保育も見守る保育も経験していない職員で一から始めました。

GT活動報告



GT活動報告

海外保育視察研修

【韓国】

ソウル 平成28年10月30日(月)～11月4日(金)

柯ニヅッ (子どもの家) 幼稚園 (梨花女子大学附属幼稚園) 等

【ドイツ】

ミュンヘン&レーゲンスブルク 平成29年6月26日～7月3日

著書『見守る保育』外国版への翻訳の動き

『見守る保育』中国語版	2013年11月発行
『012歳の保育』中国語版	2014年6月発行
『食育』中国語版	2014年9月発行
『見守る保育』韓国語版	2016年9月発行
『012歳の保育』英語版	2017年度内に発行予定



科学についての内容を販売



80名程が懇親会に参加



会話を盛り立てる食事の数々

今後の地域勉強会の開催日程

GT 熊本 8月18日～20日

ドイツ研修大同窓会&講演会 in 福岡 8月26日～27日

GT 長崎 9月1日～3日

GT 福岡 10月28日～29日

GT 関東 11月10日～11日

GT 長野 11月17日～18日

GT 富山 12月8日～9日

GT 福岡 2月2日～4日

盛り上がりを見せた懇親会

例年以上に盛り上がりを見せたのが夜に行われた意見交換会です。

意見交換会は、立食形式で他園の皆様と交流を図るひと時でもあるのですが、出席された皆様に一言ずつセミナーで学んだことや園での取り組みなどを発表して頂く時間も設けています。

ある園の先生からは、「同じ法人園同士でスカイプを繋ぎ科学の体験をしてもらうことにしました。子どもたちから『何で繋がるの?』『どうして?』とそんな体験になるよう計画中です!」とありました。

また別の園の先生からは「子どもたちが水着ファッションショーをしています。園内をランウェイのように歩き、タオルをバサッと取りかっこよく決めています!」など、発表を聞いている先生方も頷きながら、

「面白そう、うちでもやってみよう!」とワクワクした様子で、会場には楽しい雰囲気が溢れていました。

次号では、セミナー2日目の様子をお送りします。

(報告者: 株式会社カグヤ 奥山卓矢)

●過去のバックナンバー

第17号

新宿せいが子ども園 父親保育

第18号

築120年古民家『聴福庵』2017②

第19号

織姫さん、機織りに何想う

<http://www.caguya.co.jp/topics/news/p9889/>



〒161-0023

東京都新宿区西新宿3-2-11 新宿三井ビルディング2号館10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行: 株式会社カグヤ 奥山卓矢



メールマガジンのご登録は、QRコードからお願いします。

今、保育園・幼稚園は、家庭の中だけでは体験できない人との関わりを保障できる貴重な場です。それぞれの子どもの特性を見つめ、子ども達が様々な関わりの中で、自立と自律を学ぶことを保障していくことが今求められています。そのために、子ども達が自発的に活動できる環境を用意する、見守る保育が必要です。子どもに沿った子どもが主人公となるような保育を考えます。

見守る保育の基本—異年齢児保育とは—

この会も長くなって、皆さんの中には初めての人もいれば何回も来ている人もいます。基本を改めて聞くとそういうことなのかと思うこともあるのでそういったことを話す。まず皆さんが見守る保育と言うと何を思い浮かべるか。見学をしたときにどこを見て、どこに特徴を感じるか。同じ仲間なのでそれほどではないと思うが、最初に目がいくのが保育室がオープンで異年齢で保育をしていて、いろいろなコーナーがあって子どもが選んで遊んでいることを見て驚くことが多い。

それは多くの園の部屋は分かれていて、そこに年齢別で先生が前に立って話すことが多いから。だんだん私たちが提案してきた、私が保育に入ったころに提案していた保育がスタンダードになって来た。例えば、子ども園になる条件があり年齢ごとに部屋を分けなさい、壁を作りなさいとなっていたのが次第にパーティションでもいいなどとなって来た。お茶大付属のこども園へ職員と見学へ行ったら、3,4,5歳が一部屋で異年齢でコーナーで遊ぶ形をとっていた。私たちの特徴と言われたのが普通になって来た。見学者へよく言うことがある。保育室の部屋が分かれているのは日本の特殊な事情がある。キンダーガーデンはドイツでフレーベルが作った。何でキンダーガーデンを作ったかという、子どもには子どもの時期があると考えた。その時は3歳以上で考えていて、それが未だに3歳以上の施設がキンダーガーデンと考えられている。その時にフレーベルが考えたのが子どもの園（その）と考えたので、いろいろ遊べるようにコーナーで子どもが遊んでいる。園庭は林や木がいっぱいあって、庭のように走り廻れるように作った。日本の幼稚園はお茶大が最初にキンダーガーデンを作った。お茶代付属のプレスクールとして5歳児の施設を作ったのが幼稚園。プレスクールなので小学校をモデルにして部屋が分かれ、生年月日、年齢別、小学校の校庭のようにがらんどで軍事教育のために作ったものを幼稚園でも作り、前に教卓・黒板があり子どもが座っている。園庭は真ん中が広い空き地になり、フェンス越しに筋力トレーニング用の鉄棒などがあり、キンダーガーデンと出発が大体にして違う。私が保育園を始めた頃は公立保育園はほとんどが1年保育。5歳児だけだった、いわゆるプレスクール。それが4歳から受け入れるようになり、3歳も受け入れるようになった。うちの上的子は2年保育、娘は3年保育。というように、そして4年保育と学年を下げていったので発想が違う。やはりだんだんと子どもにとってどういうことがいいかと外国に近づいてきた。私たちはそれをもっと前におかしい、学校ではない、子どもの発達からきちんとしていこうと考える。

そうすると異年齢児保育のもう一つの特徴、異年齢をしていない園もあると思うがこれをどう説明するか。一昨年、異年齢児保育の文献を調べていると、ある大学の先生が異年齢児保育の歴史を調べていて、その論文に私の名前が出てき

た。「藤森氏の考えはこうである」と書いてあった。私の考えは特殊であると書いてあり驚いた。かつて学校のように年齢別でしていた。それに対して社会に出るといろいろな年齢がいる。いろいろな人で社会が構成されている。その中で思いやりが育つとって、異年齢児保育を行った園がいくつかあった。3,4,5歳を分けていたのを一つにして、いわゆる縦割りを構成していた。それを反対する人たちが3,4,5歳を一緒にしたら発達幅が広く、どこに合わせて保育をすればいいのか。真ん中の4歳にすると3歳児には難しいし、5歳児には簡単すぎる。先生はどこを見ればいいのかと異年齢児保育を反対した人がいた。一方で、子どもたちは異年齢の中で思いやりが育つからいいのではという人もいる。例えば、昨年行った韓国では異年齢をしたことがあったが、保護者の反対で年齢別に戻っている。異年齢児についていうこともあるが幅がある中で一つのことをやって、当然3,4,5歳を一緒にして七夕の飾りを作りましょう、では同じことをするには無理がある。それは個人を差別しているように思うが、私からすると個人の発達を無視しているのは日本の年齢別だと思う。日本の保育は年度別保育。4月から3月生まれにから同じことをさせている、一体どこに合わせるのだろうと私から思うと思う。そうすると、3月生まれはきつい。皆さんは身の回りを見てみるとリーダーシップをとっている人は大体4.5月生まれ、ずっと早く生まれて来ているので社会に出てからも4.5月生まれはリーダーシップを取るタイプになりやすい。3月生まれは寿命が短いとも言われている。それでいて年齢別は発達が近いから同じことをさせているというが、違うことをさせる。3.4.5歳で分けられると日本全国3歳は簡単なことをさせ5歳は難しいことをする。教えて覚えさせるのならいいが、発達をきちんと遂げさせようとする場所ではそれでは無理がある。そうではなくその子自身の発達を見て、発達にあったことをさせましょうというのがある。

例えば、見学に来た方はわかると思うが七夕の飾りがあった。かつてだったら3.4.5歳が分かれていたら、七夕が近いから先生が七夕の制作をしましょうとしたら、3歳なら一回切りでできるものを考える。4歳は連続切り、5歳は途中切りと考えるが、個人で見たら3歳児がハサミが使えなくて5歳がみんな使えるわけではない。3, 4, 5歳児にどれを作りたいか3種類見せてどれをしたいと聞くと、自分の発達にあったものを選ぶとする。結果的に3歳が簡単なものを選ぶことが多いかもしれないが4.5歳も選ぶこともあり、結果的に異年齢になる。違う年齢で一つの制作をさせましょうではなく、結果的に異年齢でよとなるのが一つの異年齢。3歳はカニさん歩き、5歳になると泳がせると言っても、スイミング行っていれば3歳でも泳げるし、5歳でも水が怖い子もいる。その子自身が水に親しんでいるかによって慣らしていかないといけない。これを3.4.5歳の子はどこに入るのかを決める、カニさんチームは水が怖い子が多いから3歳が多いかもしれないが5歳もいる。年齢で分けて保育をするのではなく課題で考える。プールに入る時に何をしたいのか、その子がどれくらい平気かで関わり方を変えないといけないのが一つの異年齢保育。異年齢だと発達が遅れるのではないと言われるがそんなことはない。5歳児で気おくれする子もいるが、5歳の中だとクラスの中でいじめられる。5歳の樹の弱い子でも4歳の子を引き連れたりすると常にいじめられっ子ではなく、リーダーシップを取ることもできる。そういう意味で3.4.5歳を一緒にすることもある。いじめられるのではと思うかもしれないが逆。小学校でも特別活動で異年齢活動を多くしている。異年齢をしている学校ほど、いじめが少ないという結果が出ている。

インドでオオカミに育てられた少女は四つ足で育てられていた。オオカミの中で育てられると立てなかった。それと同じように一年中0歳しか見ていなかったら発達していかない。0歳が歩いている子や手づかみ食べをしている子、フォークを食べていることを見ることで必死に真似をしようとする。今日見て頂いてとわかると思うが、1歳児が汚れたエプロンを自分の袋に入れようとした。0歳も1歳を見て真似しようとする。これも異年齢児保育の一つ。見て真似しようとする環境を作ることも異年齢保育。例えば、私の園でもお楽しみ会では年齢別です。何でかという保護者は年齢別

のほうが見やすい。5歳児は自分で台本を作ったり自分たちで作ったりする。それを3.4歳の部屋の隅でする。3.4歳はそれを見ているので年長になった4歳児がこういう台本でやりたい、練習したいと言ってくる。いくら年長だけでやるからと言って年長だけのクラスでやっていたら伝承しない。子ども文化が伝承されるのは異年齢を見て刺激を受ける意味がある。一緒に何も遊ぶだけではない。

私の園ではお手伝い保育と言って、週一回0.1歳ところへ年長がお手伝いに行くことがある。中には手伝わず遊んでしまう子もいる。先生も困ったと言うが、そういう時はこう言うことを言う。5歳児がほっておいて遊んでいる子もいるが、1歳のおもちゃで遊んでいるのを見ると、1歳児が興味を持つ。こんな風に遊んでいるんだというのもお手伝いだと思う。そこにいる部屋のおもちゃで遊んで見せることも異年齢児保育の一つ。5歳児が帰った後に凄い作品を作り始めることもあって、見ること見られる、真似をすることも異年齢児保育の一つ。見られる方も影響を受ける。3.4.5を一緒にしているとその効果がよくわかるのが4月当初。子どもたちで伝承されている。

今度はこのことがある。小学校と同じ年齢別でしているとする。小学校でも中学高校大学に出て世の中に出たとする。例えば保育園では異年齢、今の若い人はずっと年度別で来ているので、同じ年齢としか付き合っていない。世の中に出ると突然異年齢になって叱られるとめげてしまう。今のずっと年度別でいくので外で遊ぶとき放課後、近所で遊ぶ時も年度別で遊んでいる。昔は異年齢で遊んでいたが今は遊ばない塾へ行ってもそう、社会へ行っても慣れていないので若い人はずっと黙っている。終わった後は同期でどこかへ出かけ、異年齢では意見を言わない。同じ趣味で同じスイーツが好きで同じ年齢でしか過ごしていない。私の娘も就職するとおじさんがだめだと言っていた。おじさんと会話できないということが起こる。そうすると会話ができないだけでなくお互いをお互いの意見を譲り合うことができない。歳をとった人は頑固で譲らないし、若い人は聞こうとせずお互いをすり合わせようとししない。

異年齢の経験は小さいうちから必要。違う考えを持っている人がいることを知ること。これもとても重要なこと。アメリカで最近聞かなくなったが、よく黒人が警察官に撃たれることが続いた。それは黒人が胸に手を入れるとピストルを出すとすぐに撃ってしまう。そういう刷り込み。衝撃的な研究がある。黒人と白人の写真を見せてものがなくなりました。どっちが盗ったと思う？と聞くと黒人と答え、黒人でも黒人という。どっちと友達になりたいか？と聞くと、白人と答える。アメリカでは平等の国だけど区別するところがあるので黒人だけ、白人だけの学校に通わせていたことが多く、そうすると今ようになる。アメリカは分けることをやめた。小さい内から一緒にいると刷り込みを持たなくなるとなった。同じようにずっと年齢別でやっているとな年齢的刷り込みが多い。日本はすぐに年齢を聞く、偉さを図る。私の園で3.4.5歳一緒にいると3歳だから将棋ができないのではなくて、出来る、出来ないは個人差なのだを受け止めるようになる。そういう意味でも異年齢の良さがある。ドイツの異年齢の理由の大きなところ。刷り込みを持たないこと。同じように男と女を別々の授業でしていたことがあった。そうすると男女の刷り込みが多い。私の年齢ではそんなないと思うが女は家庭で料理していればいいと思うのは家庭科を分け、料理や掃除をし、男子は木工をやる。なんで分かれたのかと思う。女は男はこういうことをするものだ、赤ちゃんがお風呂に入れるのは女と分かれていた。そういう風にしてよくないということで一緒にした。平等だからとしたが、男と女は平等だが同じではない。ずいぶん前に脳の違いがあることが分かって来た。逆に違ってきているからこそ一緒に社会を作らないといけな。違っていているから分けてしまったら違いを感じられなくなる。やっと変わってきたのが障がいの子。隔離して別の部屋で保育をしていた。なので障がい児はこうという刷り込みを持ってしまう。それを一括りに障がいがこうとしてしまう。偏りがあるから私たちより優れているところもあるし、劣っているところもある。障がい児も一緒に保育しようとなっている。日本でまだ増えていないのが年齢

で別々にしましょうという考え方が強い。年齢によっても違うから一緒に社会を作っていくんだということがドイツでは進んでいる。0～6歳全員と一緒に保育をしている。0歳だけとか分かれていない。最初はキンダーガーデンも3～6歳だったが、0歳から6歳まで一緒にしたと聞いたのでその時、私はそうはいつでも0歳だけは違うので情緒の安定や感染症もあるから別にしないですか？と聞いたら日本では0歳だけ別にしているのですか？と聞かれたので、0だけ別にしていますと答えた。そうしたら非常に関心された。何で？と思ったら家で0歳がいたら、0歳だけ別に育てているのですね、と言われたので家では一緒ですと言ったら、何で園では一緒じゃないんですか？と逆に不思議がられた。寝ていたら静かにしておこうとか、家ではしているのでしょ？だったら園でも同じではないかと言われた。日本ではその辺を役所もこだわる。異年齢の考え方はそういう考え方で、異年齢で同じことをさせようではなく、一人一人の発達に沿ったら生年月日は関係ないでしょということ。おおむねそうであるという目安。しかし、個人個人は違うことで発達を促すには個人を見ていかないといけない。

朝子どもたちが来て、誰と遊ぶかも子どもたちが決める。年長は年長を決める可能性が高い、それは年長がおもしろいから。決して生年月日を確認しているわけではなく、その遊びがおもしろい子を選ぶ。そうすると異年齢になる可能性がある。かつてあったように3.4.5歳を一緒にしてやらせるわけではない。

—お手伝い保育—

それからもう一つ、こういうことがある。私の園では自己評価を多く取り入れている。その中でお手伝い保育をした時に事後評価をする。その時に1番のポイントは違う年齢に気付くこと。哲学的かもしれないが小さい子が、自分で服が着たいと思ったら手伝わないこと。自分で着られるように見守ること。お手伝い保育の究極は手伝わないこと。自分でやる気をどう出させるか。その自己評価をしながらこうある子がつぶやいた。「早く小さい子の気持ちに気付けるようになりたい」と言った。お手伝いに行く子が小さい子の気持ちに気付きたいと言っていた。どンドン着せる、食べさせることは素人でもできる。子どもがどんな気持ちでいて、手伝ってあげないといけないということがあった。もう一つ特徴がある。先ほど言ったようにコーナーが置いてあって選択すると。フレーベルがキンダーガーデンを作ってからずっとそう。それ自体は特徴ではない。

さくらしんまちの小嶋さんから世田谷の保育の本 [\(なるほど！せたがやのほいく～遊びと学びがいっぱい～※1\)](#) を貰った。区が親に出したお便りがある。例えば、「保育士は、子どもたちの遊びを見守りながら、成長に合わせた玩具（おもちゃ）や遊具、絵本などを必要なときに子どもの手の届くところにあるように用意していきます。そうして、子どもたちが自ら遊び込めるような時間を保障し、空間（環境）を整えていきます。具体的にいえば、保育室内ではままごとやお絵かき・造形などの「遊びのコーナー」などが設けられたり、また、園庭では、存分に外遊びができるように、砂場の整備や植栽・園の菜園などの環境も整えられています。」と区全体の保護者に配っている。これは特殊なことではない。幼児教育とはそういうものと出してしまう。これを配られた園は大丈夫かなと思う。保護者がこれがいい園と言って出している。自発性※1というところがあるが、「子どもたちの関心は周囲360度縦横無尽。「何か面白いことはないかな」。「これはなんだろう」。そうした子どもの興味関心をぐっと深めていく、それが保育士の仕事でもあります」。これ何だろうと子どもが興味・関心を持つことが仕事だと周りがらんどろたら起きない。『次は、これ! その次は、これ!!』と子どもたちを束ねるように保育士が率先指導していく保育では、子どもたちは、言われたまま、言うことを聞く姿勢となってしまいます。』率先して指導していくようなのはダメと書いてある。子どもたちの日ごりの発達様子を見

取り、これ面白そうということを知覚することを保育士は支えていくと書かれている。

ですから、これらの保育は特殊ではなくスタンダードな保育ということ。これを保育者にいくらこういう保育にしないと言ってもしない。一斉で指導していく保育から抜けきれないので世田谷区は考えた。園が変わらないなら保護者に配り、こういう園を選びなさいとした。私たちの保育は当たり前になって来た。そこ自体を「えっ？」と言うのはおかしい。

—異年齢の考え方—

次が異年齢の考え方。外国では普通。日本ではまだまだ年度別が多い。先週月曜日ドイツから帰ってきたがドイツでも年齢別をすると言っていた。日本でそういうと誤解を受ける。年齢別はどう分けるかと聞くと年齢ごとに発達が違っているから、同じ発達する日があると言っていた。年度で分けるということではなく発達で分ける日があると言っていた。週案の中で今日はハイハイをさせようと思ったら、ハイハイしている子だけで保育することを年齢別という。年度別ではない。ですから外国では私たちが提案する保育をしている。

—チーム保育とは—

それからもう一つ最近、大きな特徴がある。それはチーム保育という考え方。それに対応するものは担当性。これも捉え方がいろいろあるので日本の言葉は難しい。この間、私の園の見学者の中に大学の講師が来た。その先生は乳児保育を教えていると言っていたので、私と言い合ってしまった。まず、ぶつかったのが担当性について。まず、2人で10人見るとなると10人を把握しないとイケない。それよりも3人と担当を決めていたほうが把握できる。一人当たりの少ない人数の担当を決めたほうが把握できるといわれた。私が大体先生が10人くらいは把握できると言った。2つ目、それ以上に何を把握したいのか。その子の何を把握したいのか。やりたいことは赤ちゃんが言う。把握したら赤ちゃんが私たちに訴えかけなくても先にやってしまう。その子がこんなことしたがる、その必要はない、赤ちゃんが訴えかけたらやればいい。それよりも言ってきたことに気付くべき。1人で3人よりも2人で10人のほうがどっちが気づく可能性が高い。赤ちゃんが訴えかけたことに気付く力は1人よりも複数のほうがいい。事前に把握は知らない、訴えかけたときに応える必要があると言ったら、でも、おむつや食事は同じ人の方が安定すると言われた。遊ぶのは色々な人はいいけど、同じ人のやり方のほうが落ち着くといったからロボットにした方がいいのではと言った。人間はその日によって長くてときましよう。男性がやると乱暴になるとか人というものを感じるのではないかとと思っている。昨日と同じやり方だけが安定するとは思わない、身近な人は泣くからよくないといったので、家庭で孫を見ているとお母さんがやったら喜ぶ、父親がやると普段やっていないので泣く。泣くから父親にはやめましようというのが担当性、泣くのはストレスではなく人との距離を測っていると思っている。ストレスがかかってしまうのは虐待や愛していない人がするとストレスになる。愛していればそれはストレスではない。人によって距離が違うので泣き方が違う。

しかも、時間が長いのでローテーションを組まないといけない。シフトを組む時はクラスでシフトを組む。0の先生はこの時間はいてください、1はここにいてください、個人名はクラスで話してもらおう。どの時間帯にも0がいるようにするという組み方をする。0の先生は誰でも子どもを愛している。それにはもう一つ担当だとシフトを組みにくいし病気や行事も休みにくい。基本的に職員の家族や人生を優先させている。そこを犠牲してまで仕事をしてほしくない。職員は

何人かの内の一人。園の行事と自分の子どもの行事と重なったら総責任者でも自分の子どもの行事へ行かせている。当日だけでなく普段の練習が大事なので、普段いけば構わない。それはもう一つは保護者にもそうして欲しいから。仕事と行事が重なったら、園の行事、我が子を優先してほしいと思っている。それが可能なのはチーム保育をしているから。一人の人がかけてもあまり問題がない。うちの職員が一人休んでいるが、我が子の具合が悪かった。奥さんが務めているところはそうしてくれないのでうちの職員、男性だけが休んでいる。自分の子どもに後ろめたさを感じながら務めていると決していい保育ができない。家族が十分と大事にできるから仕事にも励んでいる。ですから、シフトのローテーションも子供を持っている人は真ん中しか入れない。早番、遅番には入らない。若い人は早番、遅番と偏ることがある。そうすると不公平だという人もいるかもしれないが、私たちは平等とは同じことが平等ではない。生き方を援助、支援することが平等だと思っている。若い人には朝にはパートがない。全員がせいしょく。12時出勤というと午前中に好きな映画が見てくれるよ、子どもがいる人は一日結局中途半端でつぶれる。ということは平等なのは自分の生き方を全うできるから平等。同じように早番、普通版に入ることが平等ではない。男性職員が多いが半分以上子どもがいる。チーム保育はチームで子どもを見ることも一つ。プライベートなことでもあるがある職員が子どもが3人いて、真ん中のこと気が合わないと思っている人がいる。我が子でも気が合わない子がいる。もし担当で気が合わない同市1年間一緒だと、それこそストレスがたまる。年度最初に誰の担当と決めることは不幸。ただし、赤ちゃん、子どもが一人の先生を決めたならそれは賛成。このこだわりについて先日赤ちゃん学会で聞いてなるほどと思ったことがあった。男性がダメな赤ちゃんがいた。お父さんはいい、お父さんは髪の毛が長くてひげが生えていたが他の職員だと泣いてしまった。先月父親保育で心配した。うちは自分の子どもとは接しないので別のお父さんが抱っこするので、作戦を考えた。ひげとかつらをつけたが泣かれた。いつも抱かれると泣いている担任を見つけて抱っこされたら、はじめて泣かなかった。子どもは優先で選んでいるようで全く知らないよりまだとまじと決めた、大人が誰の担当と決めるよりも子どもが決める。それこそ合わなかったら大変、先生の中にもいろいろな性格の人もいる。厳しい人だったら子どもは大変。ピアノが得意な人、運動が得意な人いろいろな人がいるのでチームで保育する。チームでは違う性格の人を集める。それこそピアノが弾ける人、ギターができる人、何もできない人を集めると子どもは色々なことを知ることができる。赤ちゃん学会で遠藤先生という人が愛着ということを提案していて、遠藤先生が一時期担当性を提案していたが、今ははっきりと最近の研究では愛着を持つ相手は安心基地である。負の状況に陥ったときに駆け込めるのが安心基地。保育でいう安心基地。いつも抱っこする、世話をすることが愛着ではなくて、何か負の時の陥ったときに駆け込めるのが安心基地、最近の研究では複数の人が必要、一人ではないことが分かってきていると言っていた。一人の人ではない、それはお母さんだけとは限らなくなってきた。複数との愛着関係が必要。先ほどの父親保育で赤ちゃんにとって、負の状況駆け込めたのが普段抱かれると泣いてしまっていた担任の保育士との愛着形成。最近、安心基地をもっと深めて、こう確信している。愛着存在が必要なのは人類にとって必要な中で愛着存在は大人だけでなく、複数というだけでなく子どもの中にはあるのではと思っている。他の子に行っただけで負の状況から立ち直るのではないかと思っている。子どもの社会ネットワークの中での意味は他の子がいるから。私の園でも実際、お父さんが子どもを連れてきました。置いていかれるので追って泣いた。先生はそれを見ていたら、周りで遊んでいる子を見て泣き止み、そこへ行って遊び始めた。0歳の赤ちゃんがですよ。昔だったら先生が取り上げてあやしていた。お父さんがいないと言って泣いているのに、親の代わりにあやすのではなく他の子がいることが園の特徴。楽しく遊んでいる子を見せたほうが泣き止んだ。この方法が最近、慣らし保育を短くなった方法。あやしていても泣き止まない。子どもからしたら親がいいに決まっている。園には他の子どもがいることで他の子を見て泣き止む。それが最近言わ

れている、集団的感性。子ども集団が楽しい場であるかが情緒の安定を作っているのではないかとされている。どれだけ楽しい場であるか、それが情緒の安定を作っているといわれている。

—乳児保育の提案—

乳児保育に関することは新しい提案の一つ。先ほどのこういうことがある。私たち人類は未熟で生まれてくる。脳は霊長類の中でも大きい脳が大きいのに対して人間はある決断（進化）を迫られる。二足歩行をするかしないか。二足歩行をすると地上に降りてくるわけだが、骨盤がお椀型になり参道が狭くなる。そうすると赤ちゃんが生まれにくくなる。進化の過程で考えた結果、人類は二歩行を取った。そのために参道が狭くなった。そうすると赤ちゃんは脳が大きいので生まれにくい。それなので考えた。脳は1/4だけ胎内で育てて残りは生まれてから脳を育てることにした。もし私たちの脳の大きさを100%胎内で育てるとしたら、私たち人類は9歳くらいまで抱っこして育てないといけないといわれている。オラウータンは7歳抱っこして育て、チンパンジーは4歳まで抱っこして育てないといけない。もし、9歳まで抱っこしていたら次の子が産めない。人類は短い中で3人産まないといけない。1年未満で離乳をして次の子を産む。そうすると次の子は困る。そのために家族を作り、おばあちゃんおじいちゃんが見るには脳が大きくないといけない。どうも家族を作ることによって脳が大きくなったといわれている。3.4人となると無理。家族が集まった社会は人間だけ。家族が集まった村社会、民族を人類は形成して共同保育をした。私たちは離乳すると共同保育をしてきた生き物。先ほど見学者にも言ったが3歳までお母さんがいいという神話を作った。専業主婦は今までの時代いなかった。みんな畑で働いていた。殿様の奥方くらいだが乳母が育てる。それでも遊び相手を必ずつけている。乳母対赤ちゃんではなく、友達として育てる。そうしないと切磋琢磨しない。侍の殿様でさえお母さんだけが育てることはしない。そして育てるところでいろいろなことを学ぶ。

脳を育てるのは1歳で育ち、いかに乳児保育が大事かということ。脳の機能を拡大するかどうかにかかっている。ただ面倒するだけでなく脳を拡大するための重要な育児の仕方。そして、この頃に共同保育をする中で社会を学んでいく。社会脳を育てていく。それが年子の関係の兄弟。1歳になって次の子（年子）がいると我慢しないといけない。おじいちゃんおばあちゃん、色々な民族の人に関わり社会を知っていく。その頃は他の社会は危険だった。それは襲ってくる可能性がある。他の民族は感染症を持っているかもしれない。同じ民族をどう理解したかということ、胎内で聞いているお母さんと同じ言語を話す人。生まれた後にお母さんと同じ言語を話すのと受け取るのでは違う。これが赤ちゃんにとっての特定の人。安心している人をお母さん一人を指しているわけではない。アフリカは感染症が多い国。アフリカは他の言語の人と接しないように、一つの言語の規模を小さくしている。課題で職員に聞いたのが両親とも外国でない子どもに育てられている時に私たちはどうしたらいいか。そうしたら不安になる。そのときには同じ言語で話すことが安心だが安心したと思う人には安心する。朝来てお母さんが先生に預ける。お母さんが安心して預けた先生に1日しがみつくと。担当よりもお母さんが渡した人にしがみつくと。信頼している人の態度を見ている。慣らし保育も赤ちゃんを慣らすよりもお母さんを慣らし安心させる方が、赤ちゃんが安心するようになる。そうすると見比べて親しげに話している人は大丈夫になってくる。言語が違う場合は判断するのではと思っている。乳児保育はとても大事。乳児保育は社会の中で育てられていく。親戚のおじいさんおばあさん、皆に可愛がられてきた。社会によって違いがあるのだと知っていく。それがいつの間にか核家族化になり、おじいちゃんおばあちゃんに関わらない。地域とも関わらない。家の中は母子だけになる。この母子の関係だけで3歳まで育ったら、脳を育てていく最中では社会の中で育てていない。社会の中で育てないといけない

脳が拡大しないのがエモーションナルコントロールという感情抑制力・共感力。人に共感する力が赤ちゃんは家だけだと育っていない。そのためには保育園が重要になる。特に乳児保育。それが最近思っているのが3.4.5を見たときに、どうも乳児保育の結果ではないかと考えている。3.4.5は自分でいろいろなことをする。それは集団で育てられてきているからではないかと思う。

乳児保育を丁寧にやるともちろん落ち着きます。落ち着くが、その時エルモというおんぶ紐を思い浮かべる。うちの孫を抱っこし頭に布をかけるとおとなしくなってしまう。犬でもそう。刺激を断てば静かになる。刺激を失くせば落ち着いているかという大間違い。刺激を失くすことは脳の刺激がなくなっている。同じ人だと落ち着いているのではなく、脳が動いていないということ。いろいろなものを見てきよるきよるすることが大事。興味・関心を持つことで学んでいる。これを失くせば落ち着いているわけではない。私の園でも最初の頃は先生が丁寧にしている。3.4.5ではそうではなくなる。乳児の中で怖い研究があった。昔は色々な刺激を与えましょう、働きかけをしましょう。刺激によって発達していくといわれていた。これが二者関係感性と言われていた。いわば白紙論と言われ、そこに刺激を与えることで脳が作られていくというのが基盤にあった。これを広めたのがソニーの井深さん。3歳では遅すぎると言って早期教育を広めた。最近では白紙論ではなく、いろいろなものを身に付けて生まれてくる。それを上手に減らすことが育児、専門的に言うと刈込。必要なものを削り、より強固にすることが成熟。バランスよく削れない、バランスよく減らせないのが発達障害と言われている。

その考え方をすると赤ちゃんのうちに刺激を与え、働きかけてしまうとバランスよく刈り込みができないので、4.5歳で気になるのが多いのは0.1の時に丁寧に刺激を与えすぎている。少子化になって手が出せる。4.5歳になると上手に刈り込みができず、増えその子たちが気になることとして存在しているのではないかと危惧されている。赤ちゃんは生まれながら動こうとする。大人は子どもの後を追いかけて刺激を与えるのではなく、赤ちゃんの後ろで必要な時に、自分の活動にまぎ込みたいと思ったときに積極的に関わる。興味を持って遊んでいる時はあえて介入しないのがいいと言われている。これがいわゆる見守っている。見ていて守るタイミングを計っている。いつでも守る用意ができていることが大事。サインがあって放っておいてはいけない。子どもがまぎ込みたいと思ったときは積極的に関わる必要がある。これは3.4.5歳もそう。子どもたちがせっかく遊んでいるのに先生も入れてと入る必要はない。「先生入って!」と言われたら積極的に入る。ただし小さいうちからしていないと依存してしまうことなる。まず変えないといけないのは大人が子どもに依存してしまう。抱っこすることで何となく心地いい。子どもと遊んでいると仕事した気になってしまう。そうすると必要でないのに依存し始めてしまう。このあたりが乳児の関わり方。このあたりが最近の研究から見る乳児保育の在り方。これを外国の専門用語でいうと「情緒的利用可能性」と言って、私たちは見守るといふ。情緒的とは負の状況に陥ったり、いつでも利用可能な大人がいること。でも、大人で利用可能性って言うのはおかしな言葉。英語の直訳だからこうなっていると思うが日本では「見守る」と言ってきた。世田谷区の中^{※1}にも書かれている。子どもたちを見守りながら必要があれば守ってあげる。私が提案する保育の基本はそこにある。

—胎児の研究からわかってきたこと—

もう一つには胎児の研究からわかってきたこと。胎児の研究が進んできている。おなかの中で何をしているか。例えば、新生児スマイルは子どもの意思がなく、筋肉がピクッと動くと書かれていたが、胎児でも笑顔を見せる。生理的スマイルという。これは誰に対してしているか、愛情を喚起する必要はおなかの中では必要ない。今の説では、ロシアの学者

が言っている生まれた後の練習をしている。胎内で笑顔を作って練習をしていると言われている。練習というのは自発的行動。自発的行動の一つであることが分かって来た。赤ちゃんは自発的な生き物である。自ら動いていることが分かって来た。だから私たちはどんと構えていればいい。私たちがしないといけないのは大人を求めてきたら必ず応えること。

私たちが提案する保育の復習をしたが、3.4.5歳の保育はどこでも当たり前。もう一つがチームで保育する。乳児の関わり方。敏感に反応することではなく、子どものほうがサインを出したことに対して応答することがまだまだ日本では進んでいないので提案したいことの一つ。私たちがやろうとしていることは現場から提案していることなので、いずれスタンダードになると思う。この保育だけが特殊な保育をしていると思わない。今回の乳児のことが指針で書かれるようになる。最近の研究からわかってきていることでもある。これで話を終わりたい。

本稿は、2017年7月10日に行われた第44回保育環境セミナーの基調講演の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)

関連リンク

[世田谷区 なるほど！せたがやのほいく（世田谷区保育の質ガイドライン）](#)